新刊書紹介

植物生態観察図鑑－おどろき編－

本多郁夫／著・写真

「コメントに困りました。」

本書を見た広告代理店の営業マンが，ふと漏らした言葉である。本書を手にした第一印象として，とても正直だといえよう。

本書冒頭に，ウマノスズクサの雌しべ（本文では柱頭）と雄しべの経時変化を示した6枚の連続写真がある。さらにその見開頁には雌しべと雄しべを，それぞれアップに観た画像が5枚ある。これら11枚の画像を目にすると「これはなんだろう？」と，しばし動作が止まることになる。やがて、本文と画像を付き合わせて、ようやく理解にいたる。

さらに，その雌しべと雄しべの変化と合わせて，花の内部の毛（があるのだ）に起こる変化も画像で見せている。

そこには，名前を知っている植物の変化する姿が示されており，その見知らぬ姿におどろきを感じる。そのおどろきが，ウマノスズクサだけではなく，掲載されている17種，すべての種に当てはまるのだ。

ウマノスズクサの章では，直径5㎜弱の雌しべ（柱頭）の観察を行ったかと思うと，ミズバショウの章では，花序を喰い散らかした犯人を考える。イソスミレの章では，砂浜に生きるイソスミレがどのようにして大株になるのか，群落の経年変化を追いながら考える。オニバスの章では，複数の文献から標準和名や地方名，学名の謂れを考え，また種子や花の構造，発芽から展葉・開花にいたるまでの生長過程を画像を多用して記している。観察の視点が多彩なのである。

本書の質を担保しているのは，このような著者の好奇心はもちろん，その撮影技術と観察技術にある。

クロモの章では，水面に立ち上がる直径2㎜程の雄花と零れ落ちている花粉を画像で紹介している。ヤドリギの章では，果実の果肉が3種類の成分からなることを知り，切片を作成し顕微鏡で観察・撮影している。冒頭ウマノスズクサでは，花の一部を切除，カバーガラスを貼り付けて，内部での昆虫の様子を観察している。それら全てを焦点のあった画像で示している。画像を伴なった解説は，理解しやすいのである。植物を解説する書籍は多々あるが，一つの事象に対して，これほど画像を多用して解説する書籍はあまり見られないだろう。

ただ，本書は忙しい方やせっかちな方には向かないかもしれない。

本書のおもしろさは，その画像が何を意味しているのか，読み解いてゆくところにある。別の言い方をすると，本文を読まないとわからない（画像がある）ようにできている。

これは何？と読み解くうちに，いつの間にか著者の視点と一緒になって観察している（読み進めている）ことが，本書の魅力の一つでもあるのだから，時間に余裕のあるときに読んでもらいたい。

反面，紙面構成に工夫の余地がある書籍といえよう。続編が予定されているとのことなので，次作では簡単な要約があると，より多くの人に手にとってもらえるのではないか。

本体価格 2,950円，発売：全国農村教育協会
（TEL　03-3839-9160，FAX　03-3833-1665，
メール hon@zennokyo.co.jp）